

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K00686

研究課題名(和文) 伝統知を用いたESDモデルの社会実装と国連「SDGs」における主流化の手法研究

研究課題名(英文) A Research of the Model Development and Mainstreaming the Traditional Knowledge Based ESD Model in UN SDGs

研究代表者

古澤 礼太 (FURUSAWA, Reita)

中部大学・中部高等学術研究所・准教授

研究者番号：70454379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、地域の伝統的知識(伝統知)を活用した「持続可能な開発のための教育(ESD)」の推進手法開発および「持続可能な開発目標(SDGs)」における主流化手法の検討であった。国内では、伊勢・三河湾に注ぎ込む河川の流域(伊勢・三河湾流域圏)を対象地とした調査や学習プログラムの実施を通して、ESD推進およびSDGs達成に寄与する伝統知の種類とESD手法を様々な角度から明らかにした。国際的には、ガーナ共和国首都アクラで調査を行い、植民地期限都市の持続可能な発展に資する伝統知の解明を試みた。伝統知を用いたESD推進手法を国連機関等の国際会議で報告し、SDGs推進におけるESDの主流化に貢献した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、SDGsの達成に不可欠なESD(持続可能な開発のための教育)において伝統知の役割解明を試みた点にある。国連は、世界共通の目標として掲げたSDGsの達成に向けて各国の協力と協働を呼び掛けているが、自然環境と文化の多様性に着目した地域レベルでの多様な達成手法に関する参加型研究は限られていた。伝統知を基盤としたESDモデル構築およびSDGsにおけるその主流化に関する本研究は、共通目標であるSDGsを地域レベルで再定義・解釈して、地域の自然環境および文化的多様性に根差した多様なアプローチの可能性を示唆した点で学術的・社会的意義があったといえる。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to examine the role of traditional knowledge in Education for Sustainable Development (ESD) aiming to develop and mainstreaming an ESD method incorporating traditional knowledge in Sustainable Development Goals (SDGs). In Japan, various types of traditional knowledge and ESD methods that contributes to achieve SDGs were examined and developed by implementing the ESD programs that incorporates traditional knowledge in the river basins that pours into Ise-Mikawa Bay (Bioregion/watershed). Internationally, this study has suggested the effectiveness of considering sustainable development in the African colonial city Accra in Ghana in relation to local culture based on traditional knowledge. The study has been contributed for mainstreaming of traditional knowledge based ESD method in promoting SDGs by various reports and discussions at international conferences organized by UN agencies.

研究分野：ESD、文化人類学

キーワード：ESD 持続可能な開発のための教育 SDGs 持続可能な開発目標 伝統知 生命地域 流域圏 RCE

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、国際連合(国連)による「ESDの10年」(2005~2014年)の成果と、国連「持続可能な開発目標(SDGs)」(2016~2030年)の開始があった。研究開始当時は、2014年に終了した「国連ESDの10年」のフォローアップと、SDGsの開始時期であり、SDGsにおけるESDの役割の明確化と主流化がUNESCOを中心とする国連機関からも求められていた。

2014年に開催された「ESDに関するユネスコ世界会議」では、国連「ESDの10年」の成果と今後の指針が、成果文書「あいち・なごや宣言」にまとめられた。同宣言には、本研究の着想の契機となった3つの要素が盛り込まれていた。

- ユネスコは「ESDの10年」のフォローアップ事業として、ESDの「**グローバル・アクション・プログラム(GAP: Global Action Program)**」を立ち上げ、2019年までの5年間で実施する(第13項)。
- ESDの実践は、**文化の多様性や地域の伝統的知識の尊重**のような普遍的原則の必要性和、地元、国内、地域、世界の文脈を十分に考慮するべきである(第10項)。
- ESDを教育の目標として、また、分野横断的なテーマとして**SDGsに取り入れる**よう、各国政府に働きかけを求める(第15項)。

この宣言によって、ユネスコは2019年までのESDの具体的な推進プログラム「GAP」を示すとともに、分野横断型のESDをSDGsの中で主流化させる指針をあきらかにした。さらに、ESDの実践をグローバル/ローカルの両側面から進めることの重要性が明示された。

文化の多様性理解や伝統的知識(伝統知)をESDに取り入れようという動きは、UNESCOを中心とした世界遺産教育のESDへの導入や、国連大学による生物多様性保全のための伝統知活用研究『Traditional Knowledge and Biodiversity』(UNU-IAS, 2003)などに見られた。しかし、伝統知を組み込んだ地域包括的なESD推進手法開発の取組は稀であった。

2. 研究の目的

上記の背景から、本研究の着想を得て、伝統知をもちいたESD推進手法の開発および主流化に関する研究を開始した。研究期間は、国連SDGs(2016-2030年)の初期期間であり、ユネスコのESDプログラム「GAP(2015-2019年)」の中心的な期間でもあった。この中で、本研究の成果として、下記の3点を明らかにすることを目的とした。

- 日本国内(東海・中部地域)と、アジア・アフリカの開発途上国において、持続可能な社会の構築に資する(環境保全、地方創生、経済発展などに有効な)「伝統知」に関する一次資料を収集する。また、それらの一次資料を用いて、ESDに組み込むための体系化を行う。
- 体系化した伝統知ESD推進手法の主要素を、自然環境の多様性理解を基盤とした「流域圏ESDモデル(中部ESD拠点, 2014)」(図1、2)に組み込み、東海・中部地域内で社会実装させるための活動プロセスを調査・分析する。その成果を国際的なESDネットワークの中で評価する。
- それらの研究成果を、ユネスコのGAPネットワークや国連大学のRCEネットワーク内で共有・検討し、国連SDGsにインプットすることで、SDGsの「教育」(SDG4番)および「パートナーシップ」(SDG17番)の発展に寄与する。また、SDGsにおけるESDの主流化のプロセスを研究し、国際的な合意形成の手法の一助とする。

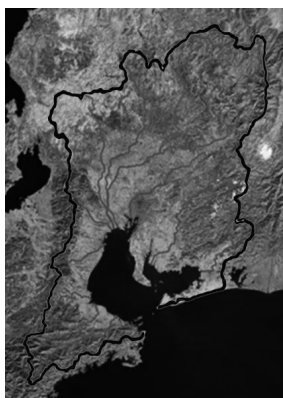


図1. 伊勢三河湾流域圏

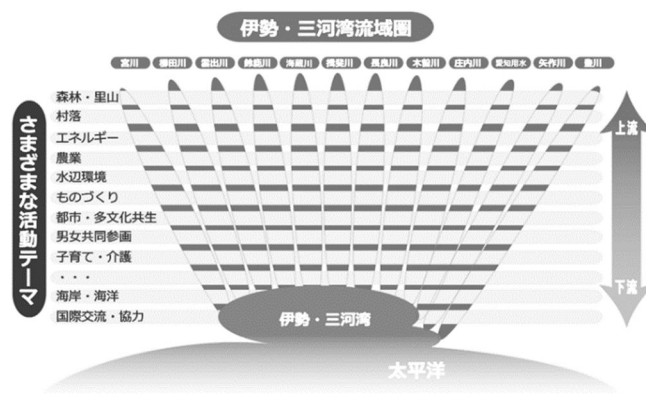


図2. 流域圏で包括的に取組む地域の諸課題

3. 研究の方法

本研究の方法は、文化人類学的手法をもちいたフィールドワークおよび、「中部 ESD 拠点」における参加型調査研究である。中部 ESD 拠点 (RCE Chubu) とは、国連大学が世界約 170 地域に認定している ESD の地域拠点 RCE (Regional Centres of Expertise on ESD) のひとつである。研究開始時に想定した研究推進方法と達成目標は下記の通りであった。

- 伝統知 ESD の基礎調査：人類学的手法を用いて、国内外（日本国内と開発途上国）で地域の課題解決活動に内在する伝統知の調査を行い、伝統知を用いた ESD の手法を検討する。国内では、東海 3 県（伊勢・三河湾流域圏）の中で、河川の流域単位で歴史的特徴と伝統知の調査を行う。その際、現代社会において維持・利用されている伝統知に加えて、技術革新などにより、現代的なニーズに応じて形を変えて用いられている伝統知にも焦点を当てて調査する。国際的には、西アフリカ・ガーナ共和国首都アクラにおいて、社会・経済的に大きく変容しつつあるアフリカ都市の中で、伝統的首長制や食文化などにまつわる地域住民の知恵が、いかに持続可能な発展に寄与しているかを解明する。
- 伝統知 ESD 手法の開発：これまでに中部 ESD 拠点が構築した「生命地域・流域圏 ESD モデル」に伝統知の要素を加えて、東海・中部地域において当該モデルの社会実装を試みるとともに、そのための有効な手法を研究する。研究代表者は中部 ESD 拠点の事務局長として参加型調査を行い、伝統知をもちいた ESD 推進モデルを、グローバル・アクション・プログラム (GAP) の 5 つの優先分野、1) 政策支援、2) 教育プログラム開発、3) 教師教育、4) 若者、5) 地域コミュニティ、それぞれの視点から検証する。
- SDGs における ESD の主流化：当該モデルを、ユネスコの GAP ネットワークや国連大学の RCE ネットワーク関連の国際会議において報告し、国際的な議論を進展させ、SDGs への応用と導入方法を検討する。このことにより、地域の自然環境と文化の多様性に対応した新たな ESD モデルを具現化し、国際的な「サステナビリティ論」の発展に貢献する。

4. 研究成果

持続可能な開発のための教育 (ESD) の推進における伝統知の役割検討と、伝統知を取り入れた ESD 推進手法の開発が本研究の目的であった。研究は、地域/国際の両側面を進めた。

東海・中部地域では、伊勢・三河湾に注ぎ込む河川の流域（生命地域・流域圏）を対象地とした ESD 推進モデルに伝統知を組み込んだ ESD プログラムを実施し、持続可能な発展に寄与する伝統知の利用方法を様々な角度から解明した。

国際的には、伝統知をもちいた ESD 推進手法を国連機関等の国際会議で報告し、SDGs 推進における ESD の主流化に貢献した。その概要は以下のとおりである。

持続可能な開発に資する伝統知の調査

研究代表者は、本研究期間内に中部 ESD 拠点の事務局長として、伝統知をもちいた複数の ESD プログラムの企画立案・実施に参画し、その伝統知 ESD モデルの開発と普及啓発に関する参加型調査を行った。その代表的な ESD プログラムは、「伊勢・三河湾流域圏 ESD 伝統知プロジェクト」および「矢作川流域圏 ESD 伝統知プロジェクト」であった。

中部 ESD 拠点の「伊勢・三河湾流域圏 ESD 伝統知プロジェクト」(共催：NPO 法人愛・地球プラットフォーム)では、マルチステークホルダー参加型の伝統知調査、伝統知 ESD データベースの構築、伝統知 ESD ワークショップの開催の 3 活動を通して、持続可能な社会づくりに寄与する伝統知を分析した。

伝統知の調査では、東海三県（愛知県・岐阜県・三重県）をほぼカバーする伊勢・三河湾流域圏（伊勢湾と三河湾に注ぎ込む河川流域）を対象地として、各流域の上流・中流・下流における地域活動に内在する伝統知を調査した。その際、地域の環境活動、社会福祉活動、経済支援活動、文化保存活動などに従事する多様なステークホルダーの参加・協力によって事例収集を行った。調査で対象としたテーマは、林業、衣類、食文化や、ユネスコ無形文化遺産に登録された地域の山車祭りなどである（表 1）。収集した伝統知は、後述する分析により ESD および SDGs への応用可能性を検討した。

表1. 伊勢・三河湾流域圏における伝統知をもちいた地域活動例

| | 上流域 | 中流域 | 下流域 |
|--------|------------------------|------------------------|----------------------|
| 豊川 | 組手件に見る森林資源利用と技術移転 | 生き物との共生による有機農業の実践 | 戦争遺産をもちいた平和教育 |
| 矢作川 | 木づかいの知恵を活かした山村おこし | 草木染の知恵を活かした人と自然の共生社会 | 蕃船の知恵を活かした環境保全活動 |
| | | ガラ紡を利用した衣料文化の見直し | 黒壁をアートの鳥づくりに生かす |
| 愛知用水 | 伝統「箱ずし」による地域ブランド化 | 伝統野菜を使って持続可能な食・農を考える | 亀崎潮干祭に見る三河湾の海洋文化と環境 |
| 土岐・庄内川 | 間伐材薪利用による森林整備と地域活性化 | 竹林の保全と活用の伝承 | 藤前干潟から考える伝統的な知恵 |
| | | 愛知万博跡地を使った里山と農の伝統継承 | |
| 木曾川 | 棚田に見る循環型社会の伝統 | 大山祭に見る無形文化遺産 | 日本酒の製造・販売から循環型社会をめざす |
| 長良川 | 狩猟の知恵をもちいた持続可能な地域作り | 鵜飼に学ぶ地域文化と環境 | 輪中の知恵から防災・減災を学ぶ |
| 揖斐川 | お年寄りに学ぶ山村の暮らし | 川魚料理の伝統食文化 | 桑名のハマグリから考える揖斐川の風土 |
| 海蔵川 | 「片樋マンボ」に見る伝統的水利用の知恵 | つんつく踊りの伝統と現代的ヨサイイ踊りの融合 | 捕鯨の伝統知で地域活性化 |
| 鈴鹿川 | 関宿の歴史街並みから考えるまちづくり | 池干しによる外来生物の駆除 | 舟遊びを通じた三角州の環境学習 |
| 雲出川 | 水源の森とのふれあいを通じて林業の知恵を学ぶ | 村の市場を通じた地域内外の交流 | ごんぼ祭り(牛蒡祭り)で地域活性化 |
| 榑田川 | 和歌山街道で住みよい活気あるまちづくり | 松阪農家の女性たちが取り組む食育活動 | 松阪木綿の今日的発展を考える |
| 宮川 | 鮎の「しゃくり」伝統漁法の学び場づくり | 田舎暮らしの知恵を活かしたふるさと作り | 榑屋子制度による技術伝承と共同体の維持 |

衣 = (森林資源) (水環境) (地域/防災/平和) (交通/交流) 衣食住 = (祭り)

中部 ESD 拠点が実施した「矢作川流域圏 ESD 伝統知プロジェクト」では、矢作川流域における環境保全活動を中心とした諸活動の情報収集を行った。収集した資料に基づき、矢作川流域の6つの活動団体を選定し、各種ステークホルダーからの聞き取り調査およびワークショップを実施した。これらの団体は、森林組合、環境保護活動団体、伝統的紡績事業所、農業事業体、漁業協同組合などである。

国際的には、西アフリカ・ガーナ共和国首都アクラにおいて、ガ民族の伝統首長制、伝統宗教、伝統的生業の一つである漁業などを対象とした現地調査を行った。アクラの主要民族であるガの儀礼ホモウォ祭りの儀礼食や献酒儀礼に着目し、植民地時代を経て維持・発展したガ文化の動態解明を試みた。

ホモウォ祭りでは、儀礼食としてトウモロコシ料理「ペプレ (Kpekple/Kpokpoi)」がもちいられる。年に一度のホモウォ祭りではしか食されることのないペプレは、地域住民にとって祭りに欠かすことのできない伝統食であった。しかし、トウモロコシは15世紀以降の西アフリカ沿岸部(首都アクラも沿岸都市)への西洋人の進出によって南米から持ち込まれたとする説が有力であり、ガ民族の伝統儀礼食にも西洋海洋文明との接触の影響が考えられる。

酒もまたガの儀礼に不可欠である。祈祷師は、祖霊や神々に祈りを捧げながら盃から酒を地面に流す「献酒」を行う。献酒にもちいられる酒は、蒸留酒のジンである。しかし、儀礼酒の歴史を調べると、西洋人到来以前はヤシ酒の醸造酒が儀礼にもちいられていたことがあきらかになった。ここにも、西洋文明を取り入れて方法を変化させながら伝統儀礼を維持・発展させてきたガ民族の知恵がみられた。

ガ民族の漁業文化解明と伝統知収集のための調査では、アクラのオス地区で延縄漁を営む漁業集団の社会構造や漁法・漁具をあきらかにした。オス地区の海岸にそびえるオス城(クリスチャンボーグ城塞)は、デンマーク人によって建設され、17世紀から20世紀半ばのガーナ共和国独立にいたるまでの約300年間にわたって西洋人と現地住民との交易や統治に重要な役割を果たしてきた。その海岸で営まれる漁業は、他地域と異なり延縄漁に特化していた。延縄漁は、鯛科やハタ科の高級魚を漁獲し、レストランや富裕層に消費されていた。かつては、城塞に住むヨーロッパ人にも好んで消費されていた。

近年のガーナ漁業は、漁獲量の減少、家族経営的漁業の衰退と違法操業の横行などの諸課題を抱えている。しかし、各漁港には伝統首長制と結びついた宗教的権威をも有す漁師長を頂点とする社会構造が存在し、漁港の秩序維持と漁業従事者間の相互扶助を促進していた。このように、アクラの漁業においても、西洋文明との接触の影響を受けながらも継承されている漁民の知恵がみられた。上記の研究成果は、複数の論文および学会で発表した。

伝統知 ESD 手法の開発

伝統知 ESD 手法の開発は、上記で収集した諸活動に内在する伝統知を分析し、ESD および SDGs への応用方法を検討した。

東海・中部地域では、調査で得た伊勢・三河湾流域圏で継承されている慣習や産業の事例から、地域課題解決のための学習(教育)的要素を抽出した。中部 ESD 拠点が実施した二つの伝統知 ESD プロジェクトでは、それぞれ複数のワークショップ/フォーラムを開催し、地域の活動主体とともに伝統知の ESD への活用方法について検討を行った。

こうした検討を経て、SDGsの達成に向けた3要素(SDGsの同時達成、目標の相互関連、多様な主体の連携)を満たす ESD 手法の必要性に帰結した。第一に SDGs の同時達成とは、個別課題に特化した地域課題解決ではなく、SDGs17 目標の総合的な達成である。第二の SDGs の相互関連

とは、17 目標の相互関係をあきらかにし、伝統知を異分野や異種課題解決に応用する方法である。第三の多様な主体（マルチ・ステークホルダー）の参加は、産官学民の連携による地域課題解決をめざす方法である。

「伊勢・三河湾流域圏 ESD 伝統知プロジェクト」では、主として上記第一/第二の目的をもって、伝統知の分類および異分野におけるそれらの応用方法（例：祭り保存会による伝統文化教育に、儀礼にもちいられる食物や植物を対象とした生物多様性保全教育の導入）を提示した。「矢作川流域圏 ESD 伝統知プロジェクト」では、第三の目的のもと、矢作川流域の活動 6 団体とのワークショップを開催した。ワークショップでは、多様な主体の参加と活動発展をめざして、当該活動およびそこに内在する伝統知の ESD/SDGs における価値を再認識する「熟議プログラム」を試行した。参加者が活動主体との議論をとおして当該活動の諸要素（活動の目的、解決をめざす地域課題、具体的行動、社会的意義、伝統知の種類、活動の持続要因など）を分析することによって活動の意義を可視化した。

アジア・アフリカにおける伝統知をもちいた ESD モデルの検討は、アジア地域では国連大学の RCE アジア太平洋地域のメンバーと、アフリカではガーナ共和国教育省ユネスコ国内委員会メンバーとの意見交換を通して行った。

アジア太平洋地域の RCE に対して、生命地域（Bioregion）で伝統知に着目した ESD 推進手法を提案し、RCE ペナン（マレーシア：島嶼地域）および RCE スリナガール（インド：ヒマラヤ山岳地域）の協力と情報提供を受けて手法構築の検討をおこなった。

ガーナ共和国では、ユネスコ国内委員会等の ESD 活動調査を行った。同委員会は、これまでに村落における環境保全活動や奴隷制の歴史を主題とした歴史・人権教育を実施してきた。他方、現代社会に根づく伝統首長制や伝統宗教と ESD との関連付けはなされていない。その背景には、伝統首長制と近代的ガーナ政府、伝統宗教とキリスト教・イスラームとの共存にまつわる複雑な課題があった。現時点で、ガーナにおける伝統知調査成果を現地の ESD 活動に応用するには至っていない。しかし、本研究による伝統知をもちいた ESD 手法は、環境や開発の問題だけでなく、都市文化の持続可能性に関する考察を深めることにも貢献可能である。

伝統知 ESD 手法の主流化に向けた国際的研究・活動

国連「持続可能な開発目標（SDGs）」における ESD の主流化手法は、ユネスコの「グローバル・アクション・プログラム（GAP）」および国連大学の ESD 地域拠点（RCE）等の国際会議において検討した。研究期間中、グローバル・アクション・プログラム（GAP）の関連会議に 4 回、ESD 地域拠点（RCE）の世界会議およびアジア・太平洋会議には 7 回参加して、東海地域における SDGs の達成に向けた ESD 推進手法の報告等をおこなった。これにより、複数の ESD 地域拠点が生命地域および伝統知をもちいた ESD に関心を持ち、各地の生命地域に関する情報提供を受けるに至ったため、ESD および伝統知 ESD 手法の主流化に一定の成果を得た。ESD を推進する有識者との実践的・学術的交流を通して、ポスト GAP のユネスコ活動「ESD for 2030」（2020 - 2030 年）のなかで、文化と自然環境の多様性に対応した ESD モデルをいかに国際展開させるかという新たな課題の検討もはじめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 古澤礼太 | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 オス延縄漁民の社会組織：ガーナ共和国首都アクラのガ民族漁業 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明 | 6. 最初と最後の頁 105-117 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 古澤礼太 | 4. 巻 6 |
| 2. 論文標題 ガーナ共和国アクラ沿岸部の延縄漁の漁具 - ガ族オス漁民の事例 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明 | 6. 最初と最後の頁 61-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 古澤礼太 | 4. 巻 26-2 |
| 2. 論文標題 トウモロコシの発酵主食「コミ（ケンケ）」から考えるガーナ共和国ガ民族の食文化 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 沙漠研究 | 6. 最初と最後の頁 73-79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.14976/jals.26.2_73 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 古澤礼太 | 4. 巻 5 |
| 2. 論文標題 メンバーの研究紹介と研究成果 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明 | 6. 最初と最後の頁 221-233 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 7件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 植民地起源都市アクラにおける漁業集団の社会組織：オスの事例から |
| 3. 学会等名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明 第二回国際シンポジウム（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 ギニア湾岸イギリス植民地都市アクラの都市形成 |
| 3. 学会等名 第4回アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態シンポジウム |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 ガーナ共和国ガ漁師の延縄漁具：アクラ首都圏オス地区の事例 |
| 3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Reita Furusawa |
| 2. 発表標題 Learning Bio-Cultural Diversity through Traditional and Local Knowledge for ESD/SDGs: A case of the Ise-Mikawa Bay Watershed ESD-TK Project |
| 3. 学会等名 11th Global RCE Conference（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Reita Furusawa |
| 2. 発表標題 Bioregion/Watershed ESD Model for SDGs, RCE Chubu |
| 3. 学会等名 The 11th Asia-Pacific RCE Meeting (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 カーナ共和国アクラ沿岸部の延縄漁に関する調査(中間報告) |
| 3. 学会等名 第3回シンポジウム「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態」 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 伊勢志摩サミットにおける市民参加 - 中部ESD拠点の事例から - |
| 3. 学会等名 イベント学会 第20回研究大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 FURUSAWA, Reita |
| 2. 発表標題 The Bioregional ESD Model and Cities |
| 3. 学会等名 UNESCO "Regional Conference on Learning to live Sustainably in Cities in the Arab Region Implementing Education for Sustainable Development in Learning Cities" (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 FURUSAWA, Reita |
| 2. 発表標題 The Multi-Stakeholder ESD Activities in the Ise-Mikawa Bay Watershed in the Chubu Area of Japan |
| 3. 学会等名 The 9th Tongyeong ESD International Forum 2017 (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 FURUSAWA, Reita |
| 2. 発表標題 Linking Cities with Rural Areas by Using the Bioregional ESD Model |
| 3. 学会等名 UNESCO "Asia-Pacific Regional Workshop on the Global Action Programme on Education for Sustainable Deveopment (ESD) and Cities" (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 ガーナの植民地起源都市文化 - アクラのガ族の祭礼事例を中心に |
| 3. 学会等名 第1回シンポジウム「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態」 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 西アフリカ・ガーナ共和国の新年祭にみる伝統儀礼と現代的イベントの融合～首都アクラの本モウォ祭りの事例から～ |
| 3. 学会等名 イベント学会第19回研究大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 西アフリカ・ギニア湾岸の植民地都市アクラにおけるガ漁民新年祭 |
| 3. 学会等名 日本宗教学会第 75 回学術大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 FURUSAWA, Reita |
| 2. 発表標題 Promoting the Bioregional ESD Model in UNESCO 's Global Action Program (GAP) for SDGs |
| 3. 学会等名 International Conference on Climate Change, Biodiversity and Ecosystem Services for the Sustainable Development Goals: Policy and Practice (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 古澤礼太 |
| 2. 発表標題 植民地起源都市アクラのトウモロコシ祭りガーナ共和国ガ民族のホモウォ祭りに見るトウモロコシの共食を通じた地域社会の紐帯維持 |
| 3. 学会等名 日本アフリカ学会第53回学術大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計10件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 古澤礼太 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 風媒社 | 5. 総ページ数 89 |
| 3. 書名 持続可能な発展への挑戦：中部ESD拠点が歩んだ国連ESDの10年 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 今井一郎、田原範子、田村卓也、古澤礼太、伊藤千尋、藤本麻里子、大石高典、萩原幹子、山田孝子、中川千草、中村亮 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 春風社 | 5. 総ページ数 316 |
| 3. 書名 アフリカ漁民文化論：水域環境保全の視座 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 古澤礼太、奥村香菜子、川村真也 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 中部ESD拠点協議会 | 5. 総ページ数 148 |
| 3. 書名 持続可能な地域を造るポリシーメーカーの育成：中部サステナ政策塾の取り組み Vol. 3 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Reita Furusawa, Shinya Kawamura | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 RCE Chubu | 5. 総ページ数 22 |
| 3. 書名 Policy Maker Education for Sustainable Development: The Chubu School of Sustainability Policy Vol.3 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 古澤礼太、奥村香奈子（編） | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 中部ESD拠点協議会 | 5. 総ページ数 158 |
| 3. 書名 『持続可能な地域を造るポリシーメーカーの育成 - 中部サステナ政策塾の取り組み Vol.2』 | |

| | |
|------------------------------|--------------------------|
| 1. 著者名 金澤一輝、中島江梨香、古澤礼太（編） | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 中部大学ドキュメントセンター | 5. 総ページ数 208（134-138） |
| 3. 書名 日本農業の持続可能な発展を考える | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 別所良美、古澤礼太、原理史、浅田益章（編） | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 中部ESD拠点協議会 | 5. 総ページ数 60 |
| 3. 書名 流域圏の持続可能性を熟議する -矢作川流域圏ESD伝統知プロジェクトの取り組み- | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 古澤礼太、奥村香菜子、原理史（編） | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 中部ESD拠点協議会 | 5. 総ページ数 72 |
| 3. 書名 伝統知を活かした流域圏のESD -伊勢・三河湾流域圏ESD伝統知プロジェクトの取り組み- | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 古澤礼太、保浦徹、中島弘象（編） | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 中部ESD拠点協議会 | 5. 総ページ数 80 |
| 3. 書名 持続可能な地域を創るポリシー・メーカーの育成 -中部サステナ政策塾の取り組み- Vol.1 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 FURUSAWA, Reita (Ed.) | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 RCE Chubu | 5. 総ページ数 49 |
| 3. 書名 Policy Maker Education for Sustainable Development -The Chubu School of Sustainability Policy-Vol.1 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| 中部ESD拠点ウェブサイト http://chubu-esd.net/ |
|--|

| | | |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | | |
| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |